

教師のビリーフ調査

専任講師 刈谷仁美

(2006.9.1受)

要 旨

同じような教授経験を積み重ねているにもかかわらず、教授活動に関する意見の相違が見られるのはなぜかという疑問を出発点に、本校教師19名にアンケートによるビリーフ調査を行った。調査によって、特に対立する項目などや一致するビリーフは見られなかった。

<キーワード> 教師 ビリーフ 教授活動 ビリーフに影響を与えたもの

1. はじめに

2. 調査概要

2-1. ビリーフの調査対象・方法

2-2. 調査票

3. 調査結果と考察

3-1. アンケートの調査結果

3-1-1. 回答分布

3-1-2. 回答3に付随するコメント

3-2. その他の質問の答え

3-2-1. 変化したビリーフについて

3-2-2. ビリーフに影響を与えたものについて

4. まとめ

4-1. 調査の問題点

4-2. 今後の課題

参考文献

1. はじめに

本校の特色として、同レベル帯の単数または複数クラスを教師のチームで担当し運営するというチームティーチング制が挙げられる。スケジュール担当者が作成するスケジュールの進度が適切かどうか、あるスキルを育成するための活動は現行のままでよいのか、ある学生がクラス移動するべきか等々、様々な事項についてチームを構成する教師で話し合う。意見の相違が見られることもある。

本校では教授経験が10年以上という教師も少なくない。同じ学生を担当し、同じような経験を重ねてきた我々ではあるが、ある事項に対してはまったく反対の意見を持つことがあるのはなぜであろうか。

この疑問を解明するための取り掛かりとして、今回、それぞれの教師の教授活動の基盤となるものとして、それぞれの教師が持つ言語学習についての信念（ビリーフ）を調査した。

2. 調査概要

2-1. ビリーフの調査対象・方法

2006年3月10日にビリーフ調査票を本校日本語科教師20名に配布し、調査への協力を依頼した。回収した調査票は19部であった。調査票の説明では無記名で依頼したが、後に回答の不明な点を確認する必要もあるかと思い、差し支えなければ記名をお願いした。しかし、全員に連絡が行き届かず、記名9、無記名10であった。日本語教授経験については10年以上の回答者が13名、10年未満が6名である。

2-2. 調査票

ビリーフ調査によく用いられるHorwitz(1987)において提案されたBALLI (Beliefs About Language Learning Inventory)をベースに片桐(2005)を参考にし、50の項目を決めた。また、調査対象が教師であるのでこれに合った形に調整した。50の項目は、1) 教師の役割、2) 教授法・教室活動、3) 言語学習と文化の関係、4) 言語学習の性質、5) 言語習得と日本語、6) コミュニケーション志向、7) 文字学習、8) 初級レベルでの活動、の8領域におけるビリーフの

記述である。HorwitzのBALLIの項目では1)～7)の7領域があるが、本調査ではより具体的に教師の教授活動を支えているものとしてのピラーフを調査するために8)を加えた。初級レベルでの活動に限定したのは、各項目において「レベルによって違うので答えられない」という回答を避けるため、レベルを限定したほうがよいと考えたからである。初級にしたのは本校では比較的初級レベルのクラスが多く、このレベルでの教授経験が豊富な教師が多いためである。

これらの50の項目に対して以下の形式で回答してもらった。

1 教室活動のイニシアティブは教師がとるべきである。

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5
まったくそう思わない そう思わない どちらともいえない そう思う 強くそう思う

()

また、記入上の注意として以下のことをお願いした。

1. BIL（文化外国語専門学校）での教育を念頭におくこと
2. できるだけ一般化して答えること
3. 3「どちらともいえない」の場合は（ ）にどのように解釈したらよいかコメントを入れること

1についてのコメント例

- ・教師がイニシアティブをとるべきときとそうでないときがあると思う。
- ・質問の意味がよくわからない。

さらに最後に、ここ5年でピラーフが変化したと思う項目とピラーフに影響を与えたと思うものを挙げてもらった。

3. 調査結果と考察

3-1. アンケートの調査結果

BALLIを用いたピリーフ調査の先行研究では、領域ごとに各項目における各回答の割合や回答値の平均値を示し、全体の傾向を探るものが多い。しかし、ここでは回答の分布と平均値に着目し、どのような項目でピリーフが分かれているのか、また、一致しているのかを探ってみたい。

3-1-1. 回答分布

全体的に見ると、それぞれの項目に対する肯定～否定のレベルを示す1～5による回答は分散傾向にあると言える。回答が1～2の範囲に収まるものはなく、3以内の項目が19、4以内が26、1～5の全てに回答があったものが5であった。各項目の平均は最低が1.63で最高が4.36と幅がある。

平均値が4以上のものは以下の6項目である

4. 学習者が参加できる活動を授業に取り入れるのが好き。(教授法・教育活動 4.15)
30. ペアワーク・グループワークを授業に取り入れることが多い。(教授法・教室活動 4.11)
32. 学習者が授業の内容やスケジュールを決めることがあっていいと思う(教師の役割 4.21)
35. 非言語の要素も言語授業に取り入れられるべきだ。(言語学習の性質 4.05)
42. 教科書の例文を理解することは大切だ。(初級レベルでの活動 4.05)
50. 自分の言いたいことが言えることが大切だ。(初級レベルでの活動 4.36)

()内は領域と平均値。以下も同様。

傾向としてはコミュニケーション重視の項目が目立つ。

平均値が2以下のものは以下の1項目のみであった。

7. ネイティブレベルになって初めて日本語をマスターできたといえる。(言語習得と日本語 1.63)

回答が1～5に分散しているものは次の5項目である。

- 9. 日本語は4スキルバランスよく学ぶことが大切だ。(文字学習 2.68)
- 16. 日本語は日本で学ぶのが一番よい。(言語学習と文化の関係 2.94)
- 27. 外国語を一人でマスターするのは不可能だ。(教師の役割 2.73)
- 34. 教師は学習者を評価しなければならない。(教師の役割 2.73)
- 45. 文型を使って自分で作文することは大切である。(初級レベルの活動 3.57)

回答の範囲が1～2に収まる項目はなかったため、3の範囲にあるもの19項目を一致傾向の強いものとしてまとめた。①回答が3～5にある肯定傾向の強い項目、②回答が2～4にある中立の項目、③回答が1～3にある否定傾向の強い項目に分けたが③に該当する項目は存在しなかった。①②に該当する項目は以下の通りである。

①肯定傾向の強い8項目

- 4. 学習者が参加できる活動を授業に取り入れるのが好き。(教授法・教室活動 4.15) *
- 23. 繰り返し練習することは大切だ。(教授法・教室活動 3.89)
- 24. 一般的に言えば言語学習の目的はコミュニケーションである。(コミュニケーション志向 3.84) *
- 32. 学習者が授業の内容やスケジュールを決めることがあってもいいと思う。(教師の役割 4.21)
- 35. 非言語の要素も言語授業に取り入れられるべきだ。(言語学習の性質 4.05)
- 42. 教科書の例文を理解することは大切だ。(初級レベルでの活動 4.05)
- 46. 文型を使って自分で話すことは大切である。(初級レベルでの活動 3.94)
- 50. 自分の言いたいことが言えることが大切だ。(初級レベルでの活動 4.36)

*の4と24については、4もしくは5と回答した教師が18名であったが、1名が2と回答したため、連続した3範囲以内の答えではない。この二つの項目で2と回答した教師は同一教師であった。

②中立傾向の11項目

- 1. 教室活動のイニシアティブは教師が取るべきである。(教師の役割 2.94)

- 6. 外国語学習で最も重要なのは語彙学習である。(言語学習の性質 2.78)
- 10. 日本語が上手になるためには日本の文化を学ぶ必要がある。(言語学習と文化の関係 3.52)
- 14. 教師は学習者に宿題を出すべきだ。(教師の役割 2.73)
- 19. 正確な発音で話すことは大切だ。(コミュニケーション志向 3.21)
- 22. 学習者は教師のアドバイスに従ったほうがよい学習結果が得られる。(教師の役割 2.89)
- 26. 文法や表現を学習者に説明することが得意だ。(教授法・教育活動 3.21)
- 36. 学習者にとって難しいぐらいのレベルの教材や活動が結果として日本語能力を伸ばすと思う。(教授法・教育活動 3.68)
- 38. 私は日本語がよく分からない学習者ともよくコミュニケーションがとれる。(コミュニケーション志向 3.21)
- 43. 教科書の例文を覚えることは大切だ。(初級レベルでの活動 3.18)
- 44. 教科書の本文や例文を何度も読むことは大切である。(初級レベルでの活動 3.26)

特に全体的な傾向は見られなかったが、否定的回答より肯定的回答がずっと多いことがわかった。また、最も一致したものでも連続した3の範囲に分散することから、本校の教師全員が肯定的である項目、また否定的である項目は存在しない。

3-1-2. 回答3に付随するコメント

アンケート実施時に、3「どちらともいえない」と回答する場合はコメントをつけるように依頼した。以下はコメントをまとめたものである。()内は質問項目。

- ・レベルによって違う。(1. 教室活動のイニシアティブは教師がとるべきである。)
- ・何をイニシアティブととらえるか、よくわからない。(1. 教室活動のイニシアティブは教師がとるべきである。)
- ・知識として学習者が知る必要があることは多い。(2. 日本語の背景にある日本文化や日本人の考え方を伝えたい。)

- ・活動による。(5. 間違えないようによく練習してから話したほうがよい。)
- ・最初からいい加減でも慎重になりすぎてもダメだと思う。(5. 間違えないようによく練習してから話したほうがよい。)
- ・必要だがそればかりでは臨機応変の対応がつけられないから。(5. 間違えないようによく練習してから話したほうがよい。)
- ・「最も」とは言えない。(6. 外国語学習で最も重要なのは語彙学習である。)
- ・学習者の能力ややる気は実際のところよくわからないのでアドバイスしてもいいかどうか自信がない。(8. 教師は学習者一人一人にとって効果的な学習方法を学習者よりよく知っている。)
- ・ニーズによる。(9. 日本語は4スキルバランスよく学ぶことが大切だ。)
- ・バランスがよい=4技能の割合が同じではないと思う。(9. 日本語は4スキルバランスよく学ぶことが大切だ。)
- ・本来は学習者によるが、進学目的のためには全部勉強しなくてはならない。(9. 日本語は4スキルバランスよく学ぶことが大切だ。)
- ・目的による。(12. 自分の言いたいことを伝えるためなら、授業中に母語を使ってもよい。)
- ・日本語に限らず外国語を習得することは大変なことだと思う。(13. 日本語を習得するのは大変なことだ。)
- ・前半には賛成しないが、後半にはする。(11. 間違いははじめに直さないと、後で直すのは難しくなる。)
- ・間違いをし続ける期間による。はじめというのがいつまでかわからない。(11. 間違いははじめに直さないと、後で直すのは難しくなる。)
- ・母語、他の言語の習得経験の有無による。(13. 日本語を習得することは大変なことだ。)
- ・学習者のタイプによる。(14. 教師は学習者に宿題を出すべきだ。)
- ・よくわからない。(18. 学習者が日本語がわからないときは適当に意味を推測してもよい。)
- ・自信があるものとなないものがある。(20. 教科書を使わずに日本語を教える自信がある。)
- ・話の内容による。(21. 授業で学習者は教師の話に集中するべきで、勝手に話してはいけない。)

- ・学習者による。(22. 学習者は教師のアドバイスにしたがったほうがよい学習結果が得られる。)
- ・アドバイスをすべて信じるのではなく、学習者がやってみた上で判断すべきだ。(22. 学習者は教師のアドバイスにしたがったほうがよい学習結果が得られる。)
- ・学習者の学習スタイルによる。(23. 繰り返し練習することは大切だ。)
- ・あきてしまって、苦痛を感じるぐらいなら効果は薄いと思う。(23. 繰り返し練習することは大切だ。)
- ・どちらの場合もある。(23. 繰り返し練習することは大切だ。)
- ・マスターというのはどこまでのことかわからない。(27. 外国語を一人でマスターすることは不可能だ。)
- ・教師のバイアスがかかる可能性がある。(29. 日本語の授業では文化的な習慣の違いも教えるべきだ。)
- ・限定される。(32. 学習者が授業の内容やスケジュールを決めることがあってもよいと思う。)
- ・必然性があるかどうかによる。学習者の要求による。(34. 教師は学習者を評価しなければならない。)
- ・どちらも必要。(36. 学習者にとって難しいぐらいのレベルの教材や活動が結果として日本語能力を伸ばすと思う。)
- ・目的による。(37. 学習者は日本人と会話の練習をするのが望ましい。)
- ・授業中はできるが、外でのおしゃべりは苦手。(38. 私は日本語がよくわからない学習者ともコミュニケーションがとれる。)
- ・場所による。(39. 外国語はネイティブ教師に教わるのがよい。)
- ・ネイティブ、非ネイティブどちらにも長所があるから。(39. 外国語はネイティブ教師に教わるのがよい。)
- ・意味があるものかないものがある。(40. 文法や表現、会話のパターンなどの練習を含まない活動は意味がない。)
- ・それ以外に目的があればよい。(40. 文法や表現、会話のパターンなどの練習を含まない活動は意味がない。)
- ・ほとんどの人は可能だが、そうでない人を見たことがあるので、よくわからない。(41. 努力すれば誰でも初級レベルの日本語がマスターできる。)

- ・例文による。(42. 教科書の例文を理解することは大切だ。)
- ・応用できる文型として理解することが大切だ。(42. 教科書の例文を理解することは大切だ。)
- ・学習者の適性や能力による。(43. 教科書の例文を覚えることは大切だ。)
- ・文型による。(45. 文型を使って自分で作文することは大切である。)
- ・楽しくなくても役立つことが実感できればいいから。(48. ゲームなどの活動を通じて楽しく勉強することは大切だ。)
- ・そうしたい学習者はすればよい。(49. できるようになるまで繰り返し練習することは大切だ。)

できるだけ一般化して回答してほしいと依頼はしたものの、やはり選択式のアンケートでは回答しにくいものが多かったようだ。回答3以外にもコメントの記入があった。「～による」「～によって違う」といった条件を限定するコメント、「～すべきだ」という項目に対し、どちらの場合もあるというコメント、また項目自体がわからない、項目に使われている言葉が何を指すか具体的にわからないといったコメントが目立った。

3-2. その他の質問の答え

3-2-1. 変化したビリーフについて

50の質問項目の後で、以下の質問を設けた。

最後に

ここ5年で変化したものがありますか？

() はい→番号 ()

() いいえ

☆あなたのビリーフに最も影響を与えたものは何だと思いますか。

例 今までの教授経験 ある特定の出来事 留学経験自分の外国語学習経験

「ここ5年で変化したものがあるか」に対して「はい」と回答したのは15名、「いいえ」が3名、無回答が1名であった。

変化した項目は32と多岐に渡っていた。3人以上が変化したと回答したものは次の6項目であった。また、「変化したと思うが、どれとは言えない」という人も2名いた。

- 9. 日本語は4スキルバランスよく学ぶことが大切だ。(5名 回答 2→3名 3→2名)
- 12. 自分の言いたいことを伝えるためなら、授業中に母語を使ってもよい。(4名 回答 2→1名 3→2名 4→1名)
- 21. 授業で学習者は教師の話に集中するべきで、勝手に話してはいけない。(4名 回答 2→2名 3→2名)
- 32. 学習者が授業の内容やスケジュールを決めることがあってもよいと思う。(4名 回答 3→2名 4→2名)
- 41. 努力すれば誰でも初級レベルの日本語が学習できる。(3名 回答 2→2名 3→1名)
- 47. 初級レベルの文法を○○パーセント習得すれば中級レベルにすすんでもよい。(4名 70%→2名 60~70%→1名 60%→1名)

アンケートの回答で現在のビリーフはわかるが、以前はどうだったかは推測するしかない。否定傾向の変化が推測できるものは9、21、41、肯定傾向の変化が推測できるものは32である。47についてはより低い割合の理解でも中級レベルにすすんでもよい、という考えの変化が推測される。

3-3-2. ビリーフに影響を与えたものについて

ビリーフに影響を与えたものは何かという問いへの回答は以下の通りであった。

・自分の外国語学習経験	7名
・留学経験	1名
・今までの教授経験	7名
・授業でうまくいかなかったこと	1名
・海外での教授経験	1名
・大学院での実習	1名

・学生の意見	2名
・いろいろな学習者との出会い	1名
・ある特定の出来事	1名
・他の教師の意見	1名
・失敗について教師間で話し合ったこと	1名
・違うピリーフを持っている人と話し新しい観点を実感したこと	1名
・性格	1名
・子育て	1名
・第二言語習得理論 中間言語理論	1名

自分の外国語学習経験と今までの教授経験がピリーフに影響を与えたという意見が多かった。教授経験については同じ学校で教えているため共通した経験も多いと思われるが、外国語学習経験については人それぞれ違った体験をしていると思われる。このことがピリーフの違いの原因の一つになっていると推測する。

4. まとめ

4-1. 調査の問題点

今回の調査では、それぞれの教師の持つピリーフをBALLIを基本としたアンケート形式で調査した。これには次のような問題があったと考える。

まず、ベースに用いたBALLIが学習者向けに開発されたアンケートであるということで、経験のある教師が回答する場合は、答えづらいものが多いようである。「場合によって違う」という回答になりやすい。また「習得」「マスター」「コミュニケーション」といった言葉の捉え方が個人によって異なることも回答に影響を与えたと見られる。

次に、アンケート形式自体の持つ問題である。ピリーフ調査では回答者は実際に持つピリーフではなく、自分がこう見られたいという自己像が現れる傾向があると指摘されている。また、自分のピリーフというものは、必ずしも意識的にアクセスできるものではないという指摘もある。(Woods, 1996)

これらの問題点を解決するためには、経験談を引き出すナラティブ（経験談）分析の手法を用いることが効果的だと考えられる。(小玉, 2001)

4-2. 今後の課題

今回の調査は、なぜ同じ経験を重ねている教師が、様々な教育活動に関して異なる意見を持つようになったのかを知りたいと思ったことが出発点となって行われた。この疑問を解くために参考となったのは「ビリーフに影響を与えたもの」であった。

ある事項に対して、他の教師と意見が異なった時、その意見を支えている自己のビリーフと対立した相手のビリーフを考えてみることで、またお互いシェアすることで、自己のビリーフが変化し、教授活動の幅も広がることにならないだろうか。特定の事項について肯定的である時、なぜ自分はこの事項について否定的に考えるのか、自己のビリーフ、そのビリーフに影響を与えた経験も考え、常に自己のビリーフを客観的に認識していくことが大切だと考える。

今回は、筆者が調査者となって本校教師へのビリーフ調査を行った。今後も引き続きこのような調査を方法を改善しながら進めていきたいと思うと同時に、教師間でお互いのビリーフへの理解を深められるような活動を考えてみたいと思っている。

参考文献

- (1) Horwitz E. K. (1987) *Surveying Student Beliefs About Language Learning in Language Learning Stragics in Language Learning*, ED Wenden, Anita and Joan Rubin, (eds.) London Prentice-Hall
- (2) 片桐準二 (2005) 「フィリピンにおける日本語学習者の言語学習Beliefs」国際交流基金日本語教育紀要第1号
- (3) Woods, D (1996) *Teacher cognition in Language Teaching: Beliefs, decision-making and classroom practice*, Cambridge University Press
- (4) 小玉安恵、古川嘉子 (2001) 「ナラティブ分析によるビリーフ調査の試み—長期研修生への社会言語学的インタビューを通して—」日本語国際センター紀要第11号